

# 日本から見たアラスカ大学のへき地教員養成の変遷と先駆性

川前 あゆみ                      小野 豪大  
(北海道教育大学釧路校教授)      (北海道教育大学釧路校講師)

## Changes and Pioneering Aspects of the Preparing Teachers for Rural Alaska at the University of Alaska from a Japanese Perspective

Ayumi KAWAMAE                      Takehiro ONO

(Hokkaido University of Education)      (Hokkaido University of Education)

キーワード：アラスカへき地教育、アラスカ大学へき地教員養成、先住民の文化の尊重

### 概要

北海道教育大学（以下、本学）は長年にわたりアラスカ大学と教育研究交流を続けている。本研究は、アラスカ大学のへき地教員養成の変遷からその先駆性をとらえ、日本のへき地教員養成研究に示唆を得ようと考察した。

本稿では、学校や地域との強い連携の中で特別プログラムを推進してきたアラスカ大学の「地域に根差した教育」、「へき地教員養成」の展開、また、アラスカ先住民民族教育や先住民の文化を尊重した教師教育からその重要性をとらえた。アラスカでは1970年代からすでに遠隔配信プログラムの策定がなされ、早い時期から地域コミュニティに居住しながら教員養成教育のプログラムを獲得し展開してきた。現在では、大学キャンパスに登校せずとも遠隔地に居住しながら大学カリキュラムを享受することができる遠隔受信プログラムを運用しており、その先駆性を明らかにした。

### 目次

#### はじめに

#### 1. アラスカ大学フェアバンクス校のへき地教員養成の変遷

- (1) 1970年代～1990年代のへき地教員養成プログラムの変遷
- (2) 遠隔プログラムの進展と現地での教育経験プログラム
- (3) 2000年代前後のへき地教員養成プログラムの変遷
- (4) 2000年以降から最近のへき地教員養成プログラムの取り組みと外部団体とのパートナーシップ
- (5) 教員になるための方法と地域に根差した教員養成

#### 2. 現在のアラスカ州の教師の処遇と魅力ある教員養成教育

- (1) アラスカ州における教師の処遇
- (2) 魅力ある教員養成プログラムの進展

おわりに -日本から見たアラスカ大学のへき地教員養成の先駆性-

#### はじめに

アラスカ大学と本学にはいくつかの共通した特徴があることはこれまでの先行研究の到達点でも述べられている（注1）。1点目は、自然環境の厳しい地理的条件を有していることである。2点目は、キャンパスが所在する地域（ア

ラスカ州、北海道）には、へき地小規模校が多い点である。3点目は、教員養成キャンパスが複数（アラスカ大学は3キャンパス、本学は5キャンパス）あり、キャンパスが所在する地域もそれぞれ遠隔地に立地して運営されている点である。4点目は、へき地性が高い地域で持続可能な教員養成に努めている点である。アラスカ大学でこれまで培わ

れてきた地域に根差す教員養成は、歴史的な変遷を経ながら今に至っていることはこれまでの先行研究でも明らかにされているところである（注2）。本稿は特に歴史的な変遷を経ながら、どのような教員養成の移り変わりがあり今に至っているのかをとらえることによって、時代に応じて地域社会のニーズに的確に答えてきたアラスカ大学のへき地教員養成がコミュニティをベースに展開した必要性和その先駆性をとらえていく。

本研究は主に筆者らの科研調査にて調査研究（2023年3月）に協力いただいたアラスカ大学フェアバンクス校（以下、UAF）教育学部長のAmy Vinlove氏から関係する提供いただいた各資料に基づいている。そのうち本稿では訪問時におけるVinlove氏へのインタビューや提供いただいたプレゼンテーション資料に基づいて考察していく。

これまでのVinlove氏の論考には、1970年に着任したRay Barnhardt氏がアラスカ大学行動科学教育学部で主にアラスカのへき地の学校に勤める教員養成に焦点を当てた新しい教員プログラムの設計に携わった先駆者であることが述べられている（注3）（p.1）。それは、Barnhardt氏の数々の業績をみても一目瞭然であり、その功績は今もなおアラスカ州の教育関係者によって語り継がれていることを筆者らのアラスカ訪問の際にも各所から伺うことができた。Vinlove氏は、その先駆的役割を果たしてきたBarnhardt氏が教員養成プログラムの進化、そこから学んだ教訓、そしてアラスカ先住民教師の養成で直面した課題について言及し、アラスカ大学では、先人たちが主導した取り組みを継続し、現在のアラスカ先住民の教員養成教育に至っていることを述べている（注4）（p.1）。その特徴の最たる点は、アラスカ先住民の教師がアラスカ先住民である学生を指導していることである。へき地の教師のほぼ全員が外部から採用されていたため、アラスカのへき地では教師の離職が重大な問題となっており、今もその問題は継続していることを憂慮している（注5）（p.1）。これらの主張を踏まえ、本稿では、アラスカ大学の先駆的なへき地教員養成の変遷から現在、どのような取り組みに発展しているのか、その重要性を明示しつつ、日本のへき地教員養成の今後の取り組み課題をとらえていくことを課題とする。

## 1. アラスカ大学フェアバンクス校のへき地教員養成の変遷

UAF教育学部Vinlove学部長は、“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”（アラスカへき地教師の募集と養成の取り組み沿革（1970年～現在））の演題において、2023年2月にGrow Your Own (GYO) と呼ばれるアラスカの教員養成に関する情報交換会で報告を行っている。本稿では、提供いただいた発表資料を参照しつつ、UAFのへき地教員養成の歴史を辿ってみたい（注6）。

### (1) 1970年代～1990年代のへき地教員養成プログラムの変遷

#### スライド2：1970年代の状況

アラスカ州におけるへき地学校はアラスカ州運営学校（SOS）の約140校と内務省インディアン事務局（BIA）運営学校の約50校が運営されていた。当時、州全体で5人のアラスカ先住民教師がいただけであった。教師教育はUAFおよびアラスカメソジスト大学（AMU）を通じてのみ提供され、かつ「キャンパス内」プログラムのみで、コースワークには文化に焦点を当てた科目は皆無だった。

（注7）Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド2頁目を引用して筆者翻訳

#### スライド3：

#### 1966～1972年：アラスカへき地学校プロジェクト（UAF）

1966～1972年にかけてアラスカへき地学校プロジェクトがフェアバンクスで展開された。UAFにへき地の「実習校」が設置された。フォード財団からの助成金により運営され、1969年までアラスカ大学教育学部の責任者を務めたフランク・ダーネルによって始められた。その目的は、アラスカのへき地に赴任する前に、新しいBIA教師を8週間で研修することだった。その研修中に共有される内容には「実践的な情報」と「教育理論的情報」の両方があった。

（注8）Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド3頁目を引用して筆者翻訳

#### スライド4：

#### 1970～1974年：アラスカへき地教員養成団（ARTTC）

1970～1974年にかけてのアラスカへき地教員養成団（ARTTC）では、主にアラスカ先住民の教師がアラスカのへき地に赴任できるように設計された新しいモデルが提示された。そのモデルの運用資金は、アラスカ州SOSによる運営費が50%、全国教職員補助金が25%、キャリア雇用機会プログラム（COP）補助金が25%の割合で提供した共同資金を得て運営された。この運用資金は、アラスカ大学教員、AMU、およびSOSが共同で管理し、100万ドルを超える年間予算（現在のドルで650万ドルに相当）がついた。その構造と理念は、遠隔教育による初等教育学位取得を目指し、地方の10か所の拠点で提供され、60人の学生が分散して学んでいた。60人のうち30人が大学新入生で、30人が学位のための単位を半分以上取得済であった。各拠点には「チームリーダー」がおり、生徒の学習体験や遠隔授業を促進し、生徒と学校間の連絡役として機能する（非ネイティブ）認定教師がいた。学生はフルタイムで学校に通いながら、生活費と授業料をカバーする全額の奨学金を受けながら、コミュニティに重点を置いた官僚的ではない人類的な教員養成を享受した。

（注9）Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド4頁目を引用して筆者翻訳

## スライド5:

## 1974~1995年:異文化間教育開発(X-CED)プログラム

1974~1995年にかけては、X-CEDプログラムが展開された。ARTTCバージョン2.0の特徴としては、チームリーダーはへき地教員に変更された。これまでの10か所あった地域からへき地の8か所に統合され、学生は近隣のどのコミュニティにも住むことができた。初等・中等教員遠隔課程がオプションとして開講し、教員は頻繁に出張し、多くの基礎コースや教育コースを教え、また多くの遠隔指導方法を開発した。1980年に補助金が枯渇し、州の一般基金によってプログラムの費用が支払われることになり、UAF人間へき地開発学部(後にアラスカ大学へき地学部)の一部となった。1980年代において学生への奨学金は、地域企業の奨学金から提供されないときは廃止された。

(注10) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド5頁目を引用して筆者翻訳

## スライド6:

## 州全体の共有オプションとしての教員養成の進展

1971年にアンカレッジとジュノーのコミュニティカレッジが「シニアカレッジ」として指定され、学士号及び修士号の取得ができるようになった。1971年にアンカレッジのシニアカレッジが教育学士号、教育修士号、および教育修士号プログラム(おそらくジュノーも)の提供を開始した。1972年当時のUAFカタログは、フェアバンクス校のみを掲載していた。1975年にアラスカ大学は3つのキャンパスのそれぞれが、1つの分野で「主導権」を担う任務を負った(特色をそれぞれのキャンパスが打ち出した時代)。それはフェアバンクス校(UAF)がへき地、異文化、遠隔教育、アンカレッジ校(UAA)が特別教育と成人教育、ジュノー校(UAJ、1987年からはサウスイースト校UASに改変)が幼児期および教育管理者を中心にし、すべてのアラスカ大学プログラムは、3つの個別の単位認定室(MAU)が設置される1980年までUAFの認定下にあった。

(注11) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド6頁目を引用して筆者翻訳

## (2) 遠隔プログラムの進展と現地での教育経験プログラム

## スライド7:1989~2002年:UAF遠隔プログラムの進展

1989年にUAFが全米教員養成認定委員会(NCATE)認定を取得したが(遠隔プログラムを含む)、1997年にはその認定を失った(ただし、証明書はまだ州によって認定されていた)。その後、2003年にはUAFがNCATE認定を再取得した。1996年までは学部レベルの中等教育課程はキャンパスにはなかった。1998年までに、UAFでは「オン」キャンパスと「オフ」キャンパスの学位プログラムの区別がなくなり、遠隔中等教育課程も廃止された。2000年の初等学士課程入学後、プログラムは一時停止され、2000年から2002年までの唯一の認定オプションだった。2002年は、

最終学年までのコースの移行を可能にする新しい初等教育課程学士プログラムがUAAおよびUASと共同で開発された。プログラム全体は、最終学年まで単位互換が可能であり、UAFの遠隔地から受講可能になり、学士号取得者向けプログラムのみ遠隔配信で提供された。

(注12) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド7頁目を引用して筆者翻訳

## スライド8:

## 1988~1996年:ティーチャーズ・フォー・アラスカ(TFA)

UAFでのアラスカへき地教員養成には、10か月の学士号取得者向け認定プログラムがあり、へき地コミュニティでオフサイトでのフィールドワーク体験を含む積み木のようなプログラムであった。へき地コミュニティでの12週間の実習経験を完了するオプションがあり、遠隔配信プログラムではなかった。

(注13) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド8頁目を引用して筆者翻訳

## (3) 2000年代前後のへき地教員養成プログラムの変遷

## スライド9:

## 1997~2003年:へき地教員養成パートナーシップ(REPP)

このパートナーシップは助成金による資金提供があり、学区を先住民コミュニティ、企業、教育専門家、そしてアラスカ大学で構成された州全体の協力的な取り組みであった。既存のライセンスプログラム(UAF ETEP初等教育学士号取得者向けプログラムやUAF中等教育プログラムなど)と連携して機能し、その時期の単位認定はNCATE認定なしに行われUAFのへき地教員を活用した。

(注14) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド9頁目を引用して筆者翻訳

## スライド10:

## 2007年~2013年:AKT2:アラスカ州での教育への移行

学士号取得者向け中等教育プログラムはアラスカ幼児発達教育局(DEED)の支援なしで実行され、米国教育省からの助成金によって資金提供された。4か月のオンライン学習と教室の観察、6週間の教室でのインターンシップ、アンカレッジでの6週間の勤務前の現場体験(文化ワークショップを含む)があった。現在のTWTプログラム(スポンサーになってくれた学区で教えながら教員養成を完了)とよく似ているが、教員養成プログラムがDEEDの支援を得られなかった点が異なった。指導基準の習熟度を示す個別学習プランのポートフォリオの開発が最高潮に達した。プログラムには継続的な資金とそれを実行する組織が必要だったが、DEEDではどちらも不足した。

(注15) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts

to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド10頁目を引用して筆者翻訳

#### (4) 2000年以降から最近のへき地教員養成プログラムの取り組みと外部団体とのパートナーシップ

##### スライド11：その他の最近のプログラム

その他の最近のプログラムでは、アラスカ大学サウスイースト校 (UAS) のアラスカ学校のための先住民族教員・管理者養成 (PITAAS) は、2000年から現在まで、UASの既存の教師認定プログラムで学ぶアラスカ先住民の学生をサポートするための給付奨学金による取り組みである。さらに、2008年～2012年にはUAFアラスカ先住民教員養成プログラム (ANTTP) において、UAFの既存の教師認定プログラムによるアラスカ先住民の学生をサポートするための助成金による取り組みが進められている。

(注16) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド11頁目を引用して筆者翻訳

##### スライド12：

アラスカへき地教員養成団 (AITC) とアラスカ先住民教師構想高校から学位修了まで、UAFの教職課程を目指すアラスカ先住民の学生を募集しサポートした。先住民学生に対する既存のUAFサポートの評価を高め、一貫性を持たせるために2018年に開始し、専任のAITC教員メンバー、マーガレットA.カーギル・フィランソロピーからの助成金によって補完されている。その資金は2013年から現在まで続いている。

(注17) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド12頁目を引用して筆者翻訳

##### スライド13：AITCと先住民及び地元の智慧、芸術、教育の継承 (SILKAT) の取り組み

AITCには、地元の知識教育者認定プログラムがあり、「ED 111」という「アラスカの未来を教える」は高校に在籍しながら大学の単位が取れるDual Enrollment Courseがある。特徴は、単位が学位の進行に確実にカウントされるように的を絞ったアドバイスがなされている。地域拠点で実施される集中コースの調整や、学区と協力した連携構築、AITCブランディングとの提携を促進している。パートナーが目標を調整し、明確なコミュニケーションチャンネルを確保できるように配慮する。

SILKATの取り組みは、2013年からBSSDと提携、2022年からAGSDと提携した。現場でのコアプラクティスの開発と芸術ベースの教育、教員養成および現職教師向けの対応する教材、専門能力開発モデルに基づいた教師のリーダーを構築した。地域特有の芸術文化ユニットの開発で注目されるアートとアーティスト、すべての取り組みの開発において持続可能性とシステム変更に焦点を当てた。

(注18) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド13頁目を引用して筆者翻訳

##### スライド14：今日のアラスカ大学教員養成プログラム

現在のアラスカ大学教員養成プログラムでは、すべてのプログラムは、アラスカ州のあらゆるコミュニティへの遠隔配信で提供されている。アラスカ大学における第一義的なライセンスプログラムは合計12プログラムである。それらには4段階あり、就学前教育はUAA、初等教育はUAFとUAS、中等教育はUAFとUAS、特別支援教育は (UASとUAFにおいて開講されている。

(注19) UA教育プログラムの詳細については、teachalaska.orgを参照。

(注20) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド14頁目を引用して筆者翻訳

#### (5) 教員になるための方法と地域に根差した教員養成

##### スライド15：教師になるための複数の入り口

教員になるための複数の入り口があり、高校生は5年以上、大学1年生は4年以上、大学に在籍したがまだ学位を取得していない学生は3年以上、学士号を取得している学生は1年間の就学によって資格認定される。認定プログラムの単位取得の進捗は、初年度に0～30単位、中間年度に31～90単位、インターンシップ/最終準備年度に30～40単位となっており、各学生の状況に応じて就学年数と取得単位数が決まる。

(注21) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド15頁目を引用して筆者翻訳

##### スライド16：地域に根差した教員養成

地域に根差した教員養成には、次の5点があげられる。1つには、地域の歴史的知識を収集し、それを基礎として活用し、学術的経験を積み上げる。2つには、地域資源を特定し、それを尊重して指導に組み込む。3つには、生徒を教室外体験に参加させる。4つには、学生や常識にとらわれない意見を積極的に聞き、学ぶ。生徒のニーズに最も適した指導を設計し、生徒が評価されていることを示すための知識の源を養う。そして5つには、学校教育の過程において家族の声に傾聴し目標を定め、互恵的で文化的に持続的な家族参加の実践を促進する、ことを目指した。

(注22) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド16頁目を引用して筆者翻訳

##### スライド17：システムを転換

システムを転換し、要は“ここ (アラスカのへき地) に来た教師ではなく、ここで育った教師”として、アラスカ

州の教員養成プログラムを経た教師の数を倍増する（1年間に200～250人から500人）ということは、アラスカ州の教育人口が第一義的にここにやって来た教師たちではなく、ここで育った教師たちで構成されていくことに次第に転換することになる。アラスカで教育を受けた教師がアラスカの学校に留まることによって学校の定着率も安定するだろう。

(注23) Amy Vinlove氏の提供資料“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”よりスライド17頁目を引用して筆者翻訳

以上、Vinlove氏からの貴重な提供資料スライドに示されていたように、1970年代から50年以上が経ち、アラスカ大学が時代時代に置かれた状況下で先住民の文化を尊重した教員養成を推進してきたことが明示できた。また、教員養成段階における丁寧な学生サポートやコミュニティに必要な支援のために資金の獲得と成果が必要であり、その計画と成果を着実に紡いできた歴史は、日本の各地域に設置されている教員養成大学にとって、大変大きな示唆を与えていると言える。外部資金の獲得は、日本の教員養成大学で勤務する研究者にはどちらかというと疎い領域であるが、アラスカ大学のように、大学全体で予算を獲得し外部資金を得るための地道な努力に改めて学ばなければならない。

## 2. 現在のアラスカ州の教師の処遇と魅力ある教員養成教育

### (1) アラスカ州における教師の処遇

アラスカ大学の公式ホームページに掲載されているアラスカ州の教師の給与は「アラスカ州の学区では教師に高い給与やその他の福利厚生が与えられている」としている（注24）。「アラスカ州は教育者の給与が最も高い州の一つで、労働統計局（BLS）によると、小学校教師の平均給与は7万5,860ドル、中学校教師の平均給与は7万7,920ドル」であることが記されている。その内訳として「給与の範囲は、学区、教育、資格、追加スキル、専門職に従事した年数など、他の多くの重要な要素によって異なる」とし教師の給与面での魅力を示している。さらに「アラスカ州の約500の公立学校は55の学区内に組織され、これらには、市および自治体の学区および地域の教育区域が含まれ各地区には独自の給与体系がある」と明記されている。

アラスカ州の教師の福利厚生面については「一部の学区では、引っ越し手当、契約ボーナス、アンカレッジから村までの教師の往復航空券、生活費の調整などの雇用奨励金が復活し始めていて、それぞれが教師に異なるインセンティブを提供し、一部の地区では、補助住宅、カフェテリア、医療費プラン、その他の戦略により課税所得の削減を支援しようとしている」ことが明記されている（注25）。

このように、アラスカ州のへき地学校で働く教師に対するインセンティブの詳細について大学が教師を目指す人た

ちに、福利厚生面を含めた高い処遇を明示することによって、へき地の地域に根差した教員養成に意欲を高めて目指してもらおう動機づけになっている。

このことは、アラスカ州においても日本と同様に、教師の担い手不足が深刻になっていることを示す。アメリカの他の州からアラスカ州に勤務を希望する人はいるが、国内だけでは賅えずに他国の教師も採用しながら運営している実情も、現地のヒアリングで明らかになった。それは、これまで培ってきたアラスカティーチャースタンドワードや地域に根差した教育の継承の方法、つまり教員研修のあり方についても問われ直す契機となっていこう。

翻って日本でも同様の教育政策が打ち出されている。2023年には教員採用試験の志願者倍率の低下が一層際立つことが国内各都道府県の報告にも見られている。2023年8月文部科学省がホームページに掲載した、2024年度予算概算要求において、文部科学省は「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」を盛り込み、「『地域教員希望枠』の導入・拡充等の入試改革、離島・へき地、特別支援教育、不登校等の地域課題や特定分野に強み・専門性を有する教師等の地域ニーズに対応したコース・カリキュラムの構築を行う」としている。

### (2) 魅力ある教員養成プログラムの進展

本稿で述べてきたアラスカ大学のへき地教員養成プログラムが時代の変遷の中でも常に重視してきたことは、先住民の文化を尊重した教育を目指してきたことである。しかしながら、その変遷は、運用資金の獲得状況によって、へき地教員養成プログラムの内容構成にも影響を与えてきたことは既述のとおりである。先住民教師を育成するためのプログラムをはじめとしてネイティブかどうかにかかわらず先住民教育に長けた教育のあり方が追求されてきた。アラスカのへき地教員養成に草創期から長年取り組んできたアラスカ大学教育学部のBarnhardt氏が、元来地域に根差した教育を重視してきたことが今もなお継承されている。

Vinlove氏は「ARTTC 2.0:異文化間教育開発プログラム(X-CED)」において実践されてきたことを次のように述べている。「ARTTCからX-CEDへの進化は、プログラムの資金調達、管理、構造および内容の変更に反映され、当初のARTTCプログラムは多額の連邦補助金に依存しており、年間予算は100万ドルを超えていた。X-CEDプログラムへの外部資金供給は1970年代の終わりまで続き、その後、プログラムをアラスカ大学システムに正式に移行し、必要な州の資金を確保する取り組みが成功した」という事実は、資金の獲得とその成果を着実に遂行していく大学運営の在り方の重要性を指摘した（注26）（p.3）。

また、Vinlove氏は、「X-CEDプログラムは、プログラムのファシリテーターとしてだけでなく、学位取得のコースを教えるフルタイムの『地方教員』を雇用するように移行したことを契機にして、現場の数は10から8に減り、それぞれが単一のコミュニティではなく、州内の広大な地理

的地域にサービスを提供することになり、農村部の教員は指定された地域のコミュニティを広範囲に訪問し、プログラム参加者と連絡を取り合い、地元の学校やコミュニティとの関係を築いた」点に着目している（注27）（p.4）。そして、Vinlove氏は、教員養成の初期の頃から「ビデオベースのコースの開発、地方での電話回線の追加など、遠隔配信教育技術の進歩、音声会議オプション、さらにはダイヤルアップモデムを介した電子メール通信の初歩的な使用によって、コースの質が向上し、プログラムのコミュニケーションが容易になった」ことが今の発展につながっていることを高く評価している（注28）（p.4）。

また、Vinlove氏の論考は、日本のへき地教員養成プログラムに応用できる先駆性を提示している。その先駆性とは、「ARTTCおよびX-CEDプログラムの永続的な遺産」を教員養成における「現場ベースの」アプローチであるとした点である（注29）（pp.21-23）。またVinlove氏は、UAF教育学部が1970年に実験プログラムを開始して以来、アラスカのへき地に遠隔配信の教員養成プログラムを継続的に提供しており、「学生に大学の門戸を拓く」という初期のビジョンは、今もなお健在であることを強調している（注30）（pp.21-23）。

さらに、Vinlove氏は、「遠隔配信プログラムは常に技術革新の最前線にあり、すべてのフィールドベースの体験の中心としてコミュニティを重視し続けている。このフィールドベースのモデルを強化するために、私たちはアラスカ州の50以上の学区の多くと強い関係を築き、遠隔教育の生徒が最初の教育クラスから学校での良い経験と学校へのアクセスを確保できるようにした。アラスカ出身かどうかにかかわらず、アラスカのへき地で教師を養成するために設計された明確な教員養成プログラムは他にはない。その代わり、一連の複雑に学んだ教訓と外部からの圧力により、UAFはアラスカ州のすべての学校の教師を養成するというより大きな使命の一環として、アラスカ先住民教師の養成に取り組むことになった。特定の集団を対象としたプログラムを一般の集団向けに設計したプログラムに組み込むことは、特定の集団のニーズが満たされる程度に悪影響を与えると見なされる可能性がある。他方で統合されたプログラムは、すべての人々が受ける教員養成教育にプラスの影響を与えることがわかった。つまり、プログラムの卒業生、複数の背景を有するアラスカ州ネイティブも非ネイティブの両方の学生が参加するキャンパス内コースと遠隔配信コースにより、豊富な背景や経験を共有し、協力するための前向きで生産的な機会が得られる。特に遠隔配信コースでは、都市部の学生が多様な環境の学生から学び、その逆も同様である。アラスカ州全土からの学生がコースに参加することで、新任教師は、アラスカとその学校に存在する文化的、言語的、地理的両方の極端な多様性について、仲介された環境で学ぶことができる」と主張している（注31）（pp.21-23）。

つまり、Vinlove氏の主張にあるように、教員養成教育

を進めるにあたり、大学キャンパス内に留まらない地域に根差した教育を体得していくためには「コミュニティの場に基づいた教育」を基盤としたプログラムの推進の重要性に着目する必要がある。そのためには、アラスカのへき地教員養成に携わる先住民教師の育成と教員の雇用環境も含め、遠隔双方向で学修指導ができる環境維持のための予算獲得も必要であった。これまでのアラスカ大学へき地教員養成プログラムでは、長年にわたり幾多の外部資金を獲得しながら実績（大学入試—教員養成—教員採用—教員研修）を積み上げてきたことに敬意を表するとともに、日本のへき地教員養成教育の今後のあり方を検討するに相応しい実践研究として位置付けることができる。

## おわりに -日本から見たアラスカのへき地教員養成の先駆性-

本稿では、アラスカのへき地教員養成の歴史と先駆性について、UAF教育学部長であるAmy Vinlove氏の論考のうち、1970年代から半世紀にわたる特にUAFの実践から論述してきた。さらに、2023年3月にUAFに訪問した際に提供いただいた数々の資料も本稿の参考にしてきた。そして、現在教育学部長の責任ある氏へのインタビューから現在の教員養成プログラムの運用状況を伺うことができた。1970-1980年代にかけてアラスカ州のオイルマネーは州教育費への予算にも盛り込まれたが、アラスカ州内にあるへき地教育の改善に一定の貢献があった時代は、日本も同様に高度経済成長を遂げた時代と重なる。他方で、アラスカ大学のへき地教員養成プログラムは、時代が移り変わる中で運用予算措置の影響を受けながらも外部団体との連携や資金獲得による教育の質的向上を継続し、確固たる教育改革の成果を踏まえながら実績を積んできたことが今に活かされている。

アラスカでは1970年代からすでに遠隔配信プログラムの策定がなされ、早い時期から地域コミュニティに居住しながら教員養成教育のプログラムを獲得し展開してきた。そのため現在では、大学キャンパスに登校せずとも遠隔地に居住しながら大学カリキュラムを享受することができる遠隔受信プログラムを完成させている。その仕組みについては別稿にて詳細を明らかにしていくことにしたい。

近年の世界情勢の激変、気候温暖化による産業構造の変容、さらにCOVID-19の社会に与えた影響も含めて国全体の経済力や社会力の低下と人々の暮らしに与えた負の影響は未だ回復途上にある。へき地性が高いアラスカ州と北海道は、都市部に比して様々な条件下に経済的社会的な影響を直接的に受けている地域でもある。北海道の学校統廃合問題は、大陸広域性が強い地域であるからこそ、今後は遠隔双方向の授業や、教員研修の充実も喫緊の課題となっており、財政難にある地方自治体にとっては教育予算の効率化とその成果が問われている現況にある。本学が教員養成大学として地域に根差した教育をどのように充実させてい

くことができるのか、時代の変遷の中にありながらも、へき地教員養成プログラムのあるべき方策を国の政策課題も注視しつつ、今後も中心的な検討課題としていきたい。

《資料引用元の出典：Amy Vinlove “A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present”》

Slide 2: “The education program of the Bureau of Indian Affairs in Alaska 1971-7 [http://www.alaskool.org/native\\_ed/law/bia\\_edu.html](http://www.alaskool.org/native_ed/law/bia_edu.html) January 13, 2016 interview with Ray Barnhardt Catalog of the University of Alaska, 1970-71

Slide 3: January 13, 2016 interview with Ray Barnhardt

Slide 4: January 13, 2016 interview with Ray Barnhardt, R. (1977) . Field-Based Education for Alaskan Native Teachers. Cross-Cultural Issues in Alaskan Education. Fairbanks, AK, Center for Cross-Cultural Studies, UAF: 87-98. Booker, J. (1987) . The Institutionalization of a Teacher Corps Program: An Approach to the Evaluation to Innovation. International Journal of E-Learning & Distance Education, Vol. 2, No. 2, 1-13.

Slide 5: January 13, 2016 interview with Ray Barnhardt Catalogs of the University of Alaska Fairbanks, 1980-1995

Slide 6: January 13, 2016 interview with Ray Barnhardt Catalogs of the University of Alaska Fairbanks, 1970-1980 Catalogs of Anchorage Community College and Anchorage Senior College, 1969-1975

Slide 7: January 20, 2016 interview with Carol Barnhardt Catalogs of the University of Alaska Fairbanks, 1989-2002

Slide 8: Catalogs of the University of Alaska Fairbanks, 1989-1996 Noordhoff, Karen; Kleinfeld, Judith. Preparing Teachers for Multicultural Classrooms: A Case Study in Rural Alaska. Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association (Chicago, IL, April 3-7, 1991) .

Slide 9: Catalog of the University of Alaska Fairbanks, 1997 January 20, 2016 interview with Carol Barnhardt

Slide 11: PITAAS Program Overview.

<http://www.uas.alaska.edu/education/start.htm#tab2>

※上記資料の出典にはスライド番号に応じて資料引用の出典が明記されていることから、本稿においても便宜上同じスライド番号で記した。各スライドのさらなる詳細については引用元を参照されたい。

## 《注》

(注1) 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編 (2016) 『アラスカと北海道のへき地教育』北樹出版 (pp.8-9) にはアラスカ大学とアラスカのへき地学校の特徴がまとめられている。

(注2) 玉井康之・川前あゆみ (2021) 「アラスカの多文化理解教育の施策と学校・地域における共生社会実現のための教育」学会創立30周年記念論集編集委員会編・佐藤千津編著『コミュニティの創造と国際教育〈日本国際教育学会創立30周年記念論集〉』, 明石書店, (pp.86-101) .

(注3) Vinlove, A. (2018) “Lessons and Legacies: Forty Years of Alaska Native Teacher Preparation at the University of Alaska Fairbanks” ,Springer Nature Singapore Pte Ltd. P. Whitinui (eds.) , Promising Practices in Indigenous Teacher Education (pp.11-25) , ( p.1)

(注4) Vinlove, A. (2018) “Lessons and Legacies: Forty Years of Alaska Native Teacher Preparation at the University of Alaska Fairbanks” ,Springer Nature Singapore Pte Ltd. P. Whitinui (eds.) , Promising Practices in Indigenous Teacher Education (pp.11-25) , ( p.1)

(注5) Vinlove, A. (2018) “Lessons and Legacies: Forty Years of Alaska Native Teacher Preparation at the University of Alaska Fairbanks” ,Springer Nature Singapore Pte Ltd. P. Whitinui (eds.) , Promising Practices in Indigenous Teacher Education (pp.11-25) , ( p.1)

(注6) 2023年2月にアラスカGrow Your Own (GYO) 情報交換会にてUAF教育学部Amy Vinlove学部長は、“A Brief History of Efforts to Recruit and Prepare Teachers for Rural Alaska 1970-Present” の発表をしている。本稿では提供いただいた発表資料に基づいて翻訳した。演題は「アラスカへき地教師の募集と養成の取り組み沿革 (1970年～現在)」とした。

(注7) 注3の資料からスライド2頁目を引用して筆者翻訳。

(注8) 注3の資料からスライド3頁目を引用して筆者翻訳。

(注9) 注3の資料からスライド4頁目を引用して筆者翻訳。

(注10) 注3の資料からスライド5頁目を引用して筆者翻訳。

(注11) 注3の資料からスライド6頁目を引用して筆者翻訳。

(注12) 注3の資料からスライド7頁目を引用して筆者翻訳。

(注13) 注3の資料からスライド8頁目を引用して筆者翻訳。

(注14) 注3の資料からスライド9頁目を引用して筆者翻訳。

(注15) 注3の資料からスライド10頁目を引用して筆者翻訳。

(注16) 注3の資料からスライド11頁目を引用して筆者翻訳。

(注17) 注3の資料からスライド12頁目を引用して筆者翻訳。

(注18) 注3の資料からスライド13頁目を引用して筆者翻訳。

(注19) アラスカ大学教育プログラムの詳細については、[teachalaska.org](http://teachalaska.org)を参照

- (注20) 注3の資料からスライド14頁目を引用して筆者翻訳。  
(注21) 注3の資料からスライド15頁目を引用して筆者翻訳。  
(注22) 注3の資料からスライド16頁目を引用して筆者翻訳。  
(注23) 注3の資料からスライド17頁目を引用して筆者翻訳。  
(注24) <https://www.alaska.edu/teach/info/salaries.php>  
(2023.8.30UAF公式HP確認)  
(注25) <https://www.alaska.edu/teach/info/salaries.php>  
(2023.8.30UAF公式HP確認)  
(注26) 注3の (p.3)  
(注27) 注3の (p.4)  
(注28) 注3の (p.4)  
(注29) 注3の (pp.21-23)  
(注30) 注3の (pp.21-23)  
(注31) 注3の (pp.21-23)

#### 《参考文献》

- ・ Vinlove, A. (2018) "Lessons and Legacies: Forty Years of Alaska Native Teacher Preparation at the University of Alaska Fairbanks", Springer Nature Singapore Pte Ltd. P. Whitinui (eds.), Promising Practices in Indigenous Teacher Education (pp.11-25), 2018年に刊行されたAmy Vinlove氏の論考について日本語訳では「教訓と遺産:アラスカ大学フェアバンクス校におけるアラスカ先住民教員養成の40年間」と訳した。
- ・ Vinlove, A. (2016) "Place, Positionality and Teacher Preparation" Journal of Sustainability Education Vol.11 February (pp.1-16) .
- ・ 玉井康之・川前あゆみ (2021) 「アラスカの多文化理解教育の施策と学校・地域における共生社会実現のための教育」学会創立30周年記念論集編集委員会編・佐藤千津編著『コミュニティの創造と国際教育〈日本国際教育学会創立30周年記念論集〉』, 明石書店.
- ・ 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編 (2016) 『アラスカと北海道のへき地教育』北樹出版.

#### 《謝辞》

本研究は、執筆者らが採択した科学研究費助成事業基盤研究 (C) 「先駆的なアラスカ州政府の先住民教育政策と共生社会化の発展条件に関する総合的な研究 (2022-2024)」の調査研究の一環として、2023年2月27日～3月5日まで米国アラスカ州フェアバンクス市に滞在し、アラスカ大学フェアバンクス校Amy Vinlove教育学部長をはじめとしてフェアバンクス市教育委員会、複数のへき地小規模校に訪問する機会を得て、多くの知見を得た。

特にAmy Vinlove教育学部長には、アラスカ大学のへき地教員養成プログラムの変遷に関する関係資料を提供いただき、また我々の質問にも丁寧に応答いただいた。本稿ではその一部を検討したに過ぎないが、それら資料の翻訳についても許諾いただいたことに感謝申し上げたい。

ここに資料提供とともに調査訪問に際しては滞在期間中

も細部にわたり多大なご配慮をいただいたことに改めて感謝申し上げたい。なお、訳文の不備は全て筆者らの責任である。

#### 《付記》

※本研究は、2022年に採択した科学研究費助成事業基盤研究 (C) 川前あゆみ代表「先駆的なアラスカ州政府の先住民教育政策と共生社会化の発展条件に関する総合的な研究 [課題番号22K02275]」の助成金を使用した。